

豊かな感性を育む音楽科の指導

— 「みんないっしょに」の実践を通して —

木村敦子

1. 音楽科における児童の感性について

本学級では、音楽表現における児童の感性を次のようにとらえている。

気づく	① 音楽がなっていることや、楽器があることを意識していない。 ② 音楽のなっている方や、楽器のあることに気づく。 ③ 音楽のなっている方や、楽器の方を意識する。
感じる	④ 音楽に関心を示し、音楽のなっている方や楽器のある方に動こうとする。好きな活動や音がはっきりとしてくる。 ⑤ 短発的に、音楽によって身体を動かしたり声を出したり、楽器の音を出す。 ⑥ 持続して、音楽によって身体を動かしたり声を出したり、楽器の音を出す。
表現する	⑦ 音楽の流れに合わせて身体を動かしたり声を出したりする。楽器の音が分かり音を出す。楽器の音の違いがはっきり分かる。 ⑧ 指導者や友だちの動きや楽器の奏法を模倣して表現する。 ⑨ 音楽に合わせて自分で動きを作ったり、楽器で表現する。 ⑩ 指導者や友だちの表現と合わせた表現をする。合奏や分担奏をする。

このように児童の感性を捉えた上で、児童の表現する力をより豊かなものにしていくためには、指導者の支援としては、次の点を踏まえたものであることが必要であると考えられる。

- ・児童の気づきを促す教材道具である。(多様な音楽活動、楽器を準備する。)
- ・音楽が児童の活動に合わせていくことのできるものである。
- ・模倣して活動できる場を設定している。
- ・相互に聞いたり、交互に表現する場を設定している。

2. 指導事例－「みんないっしょに」

(1) 題材について

本学級では、1年生から6年生までの15名を学習集団として音楽の授業を行っている。音楽活動への児童の関心は高く、特に楽器を使用した活動を好んでいる。児童一人一人はこれまでの楽器を使用した活動を通して、それぞれ好きな楽器がはっきりとしてきている。児童の活動への意欲を高め、表現する力を育てていくためには、個々の児童が思いをこめて表現できる場を設定していくことが必要であると思われる。そこで、本題材では、教材曲「みんないっしょに」(C. ロビンズ作詞・P. ノードフ作曲)を選択し、たいこ、シンバル、リードホーン、トーンチャイム、タンブリンを演奏する活動を行っていくものである。教材曲「みんないっしょに」は、たいこ、シンバル、リードホーン、トーンチャイム、タンブリンが歌の中に順番に出てくる曲である。歌で楽器を演奏する順番が分かることから分担奏や合奏の構成が児童に分かりやすくなっている。また、一人一人の演奏する速さや音を出すタイミングに合わせて音楽が展開できるようになっている。

諸例1. 「みんないっしょに」

The musical score is written on three staves in 4/4 time. The first staff is for Taiko (たいこ) and Shingobu (シンバル), with triplets of eighth notes. The second staff is for Lead Horn (リードホーン), featuring a triplet of eighth notes followed by a quarter note. The third staff is for Tone Chime (トーンチャイム) and Tambourine (タンブリン), with triplets of eighth notes. The lyrics are: たいこ シンバル ラーッ パ そして ベル タンブリン おつぎは タンブリン もひとつタンブリン もひとつ タンブリン よういはいい? あわせよう

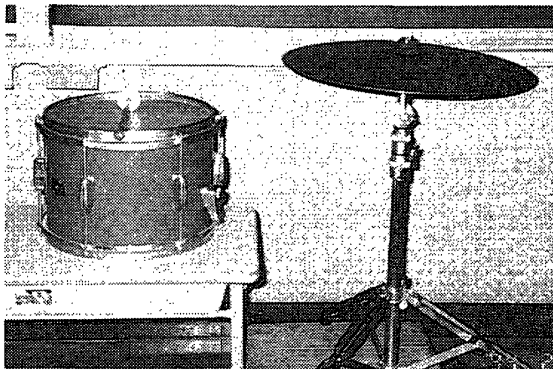


写真1 たいこ・シンバル

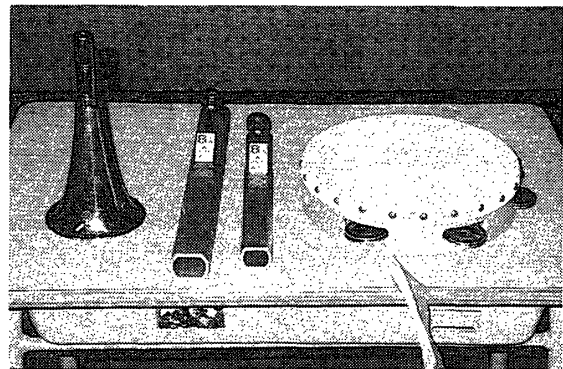


写真2 リードホーン・トーンチャイム・タンブリン

(2) 児童の実態

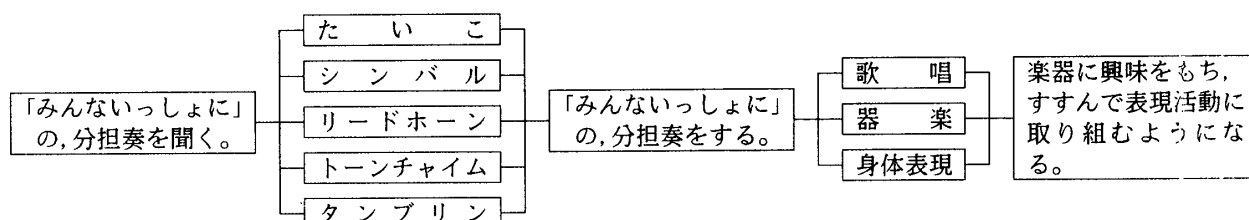
本題材の内容に関する児童の実態は次のようである。

児童	実	態
①	たいこやシンバルを好む。音楽の拍の流れや速さを感じて表現する。	
②	たいこやシンバルを好む。指導者の模倣をして表現する。	
③	どの楽器も好んで表現する。友だちと一緒にだと表現しやすい。音楽の拍の流れを感じて表現する。	
④	たいこ、シンバル、タンブリンを好む。音楽の拍の流れや速さを感じて表現する。	
⑤	たいこやシンバルを好む。友だちと一緒にだと持続して表現できる。音楽の拍の流れを感じて表現する。	
⑥	どの楽器も好んで表現する。音楽の特徴的なリズムを感じ取って表現する。分担奏の構成がわかる。	
⑦	たいこやシンバルを好む。音楽のリズムによって表現する。	
⑧	シンバルを好む。音楽の拍の流れや速さを感じ取って表現する。	
⑨	たたいて音を出す楽器を好む。音楽のリズムによって表現する。	
⑩	どの楽器も好んで表現する。音楽のリズムによって表現する。分担奏の構成が分かる。	
⑪	どの楽器も好んで表現する。音楽のリズムによって表現する。分担奏の構成が分かる。	
⑫	どの楽器も好んで表現するが、他児がたいこやタンブリンを大きな音で表現することを嫌う。音楽の拍の流れや速さを感じ取って表現する。	
⑬	たいこやシンバルを好む。音楽のリズムによって表現する。分担奏の構成が分かる。	
⑭	たたいて音を出す楽器を好む。音楽の特徴的なリズムを感じ取って表現する。	
⑮	リードホーンを好む。指導者の言葉掛けがあると持続して表現する。音楽の拍の流れを感じ取って表現する。	

(3) 指導目標

- ① 楽しんで音楽活動に参加する意欲を育てる。
- ② 音楽の流れを感じ取っていろいろな楽器で表現できるようにする。
- ③ 友だちと一緒に表現する楽しさを味わわせる。

(4) 指導内容と計画



(5) 指導の実際

児童が教材曲に出会い、集団での関わりの中で表現していくまでには、本題材の活動では、①教材曲を知る、②自分の好きな楽器を選択する、③分担奏の構成を知る、④自分以外の音を聞き友だちと一緒に分担奏をする、といった内容が考えられる。そこで児童の活動と指導者の支援を次のように行った。

児童の活動	指導者の支援
① 教材曲を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・教材曲「みんないっしょに」はどのような音楽で、どのような活動をするのかを知らせるために、複数の指導者がたいこ、シンバル、リードホーン、トーンチャイム、タンブリンを分担して演奏する。
② 好きな楽器を演奏する。	<ul style="list-style-type: none"> ・5つの楽器の中から児童が自分の好きな楽器(音色の好み、演奏のしやすさなど)を選択できるように、どの楽器も演奏できる場を設定する。
③ 分担奏の構成を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ・5つの楽器が順番に演奏していくことを知らせるために4名の指導者が示範する。その後、指導者と児童が交代して演奏できる場を設定する。 ・分担の箇所を知らせるために、楽器の名称が歌詞に出てきた時に楽器を児童の前に提示する。 ・分担の箇所を知らせるために、楽器の名称が歌詞に出てきた時に楽器を示す。
④ 友だちと一緒に分担奏する。	<ul style="list-style-type: none"> ・分担奏の順番が分かり、友だちの音を聞いて演奏できるように楽器を演奏の順番に配置する。 ・音楽全体の構成を身体で表現できるように、指揮をする活動を取り入れる。

また、個々の児童に対する支援は、次のように行った。

児童の活動と指導者の支援

児童	児童の課題	指導者の支援	児童の表現活動
① 1年	自分の好きな楽器を選ぶ。楽器の名称が分かかって分演奏をする。	分担の箇所で楽器を提示する。分担の箇所で演奏するようにことばかけをする。	好きな楽器のたいこ、シンバルの演奏する順番が分かかって分演奏した。
② 1年	自分の好きな楽器を選ぶ。分演奏の順番が分かかって演奏する。	分演奏の楽器の配置を意識できるように演奏する時に示す。	自分の分担した楽器の順番が分かかって、自分の前に演奏する友だちの音を聞いて分演奏した。
③ 1年	自分の好きな楽器を選ぶ。楽器の名称が分かかって分演奏をする。	分担の箇所で演奏するように楽器の名称をことばかけする。	自分の演奏する楽器の名称が分かかって、歌を聞いて分演奏をした。
④ 2年	自分の好きな楽器を選ぶ。分演奏の順番が分かかって演奏する。	分演奏の順番が分かるように楽器の配置と順番を歌詞の順に示す。	自分の分担の前に演奏する友だちの音を意識し順番に演奏できるように友だちを援助した。
⑤ 2年	自分の好きな楽器を選ぶ。楽器の名称が分かかって分演奏をする。	分担した楽器が歌詞に出てきた時に演奏するようことばかけをする。	自分の好きな楽器のたいこ、シンバルの分担が分かり歌をきいて順番に2つの楽器を演奏した。
⑥ 2年	分演奏の全体の構造が分かかって、ともだちの音を聞きながら分演奏をする。	分演奏を指導者が示範して全体の流れを知らせる。	自分や友だちの分担が分かかって分演奏した。友だちが演奏する時に指揮をした。
⑦ 3年	分演奏の順序が分かかって、友だちの音を聞きながら分演奏をする。	分演奏を指導者が示範して全体の流れを知らせる。	自分の好きな楽器の分担が分かかって歌を聞きながら分演奏をした。
⑧ 3年	自分の好きな楽器を選ぶ。楽器の名称が歌詞に出てくることばが分かかって演奏する。	分担した楽器が歌詞に出てきた時に演奏するようことばかけをする。	どの楽器にも興味を持って音を出そうとした。ことばかけによって分担の箇所で演奏した。

児童	児童の課題	指導者の支援	児童の表現活動
⑨ 3年	自分の好きな楽器を選ぶ。楽器の名称が分かかって演奏する。	分担した楽器が歌詞に出てきた時に演奏するようことばかけをする。	ことばかけによって分担の箇所で演奏した。歌の速さによって演奏した。
⑩ 4年	分担奏の全体の構造が分かかって、友だちの音を聞きながら分担奏をする。	指導者が分担奏を示範して全体の流れを知らせる。	自分の演奏したい楽器を意欲的に希望した。全体の分担が分かかって分担奏した。
⑪ 4年	分担奏の全体の構造が分かかって、友だちの音を聞きながら分担奏をする。	指導者が分担奏を示範して全体の流れを知らせる。	全体の分担が分かかって分担奏をした。友だちが演奏する時に指揮をした。
⑫ 4年	分担奏の演奏の順番が分かかって、友だちの音を聞きながら分担奏をする。	指導者が分担奏を示範して全体の流れを知らせる。歌詞に出てきた楽器を示す。	選択する楽器がたいこ、タンブリンへと広がった。自分や友だちの分担が分かかって分担奏した。
⑬ 5年	分担奏の全体の構造が分かかって、友だちの音を聞きながら分担奏をする。	指導者が分担奏を示範して全体の流れを知らせる。	全体の分担が分かかって分担奏した。友だちが演奏する時に友だちの援助をしたり指揮をした。
⑭ 6年	分担奏の演奏の順番が分かかって、友だちの音を聞きながら分担奏をする。	指導者が分担奏を示範して全体の流れを知らせる。歌詞に出てきた楽器を示す。	自分の分担が分かかって分担奏をした。歌に合わせてリズムを変化させて演奏した。
⑮ 6年	自分の好きな楽器を選ぶ。歌に合わせて楽器を演奏する。	分担した楽器が歌詞に出てきた時に演奏するようことばかけをする。	自分の好きな楽器リードホーンが出てくる「ラッパ」という歌詞を聞いて演奏した。

3. 考 察

児童の表現を豊かにしていく指導者の支援であったかどうか次の4つの点から考察を行う。

(1) 児童の気づきを促す教材用具であったか

児童の楽器に対する興味は多様で、「やってみたい。」と意欲を示す楽器は、音質の好みだけでなく、その楽器をどのようにしたら音が出せるか（ばちを使って打つ、手で打つ、吹く）、音が出たときの感触といったことによるものもある。本題材ではたいこ、シンバル、リードホーン、トーンチャイム、タンブリンといった5つの楽器を使用する活動を行った。これまでの楽器を使用した経験をもとに、たいこ、シンバルを選択すると表現しやすい児童（児童⑤、⑦）、リードホーンを選択すると表現しやすい児童（児童⑮）がすすんで表現に取り組むことができた。また、5つの楽器を扱う中から、自分の好む楽器がはっきりしてきた児童（児童①、②、⑩）が見られた。これは本題材で選択した教材曲「みんないっしょに」が児童の楽器に対する多様な興味を引き出すものであったことによると思われる。

(2) 音楽が児童の活動に合わせていくことのできるものであったか

本題材では、5つの楽器を順番に分担して演奏していく活動を行った。児童の表現は、譜例2・3・4に示すようなものが見られた。教材曲「みんないっしょに」の活動では、これらの表現に音楽の流れに合わせていくことによって活動が成立するものである。児童個々の楽器への取り組みが受け入れられる教材であると言える。しかし、一方では楽器を演奏する箇所が分担奏という形で限られていたため、楽器に興味を示し始めている児童（児童①、⑧、⑨）にとっては十分に表現のできるものとはなり得なかったと思われる。

諸例 2
たいこ

諸例 3
たいこ

諸例 4
たいこ

(3) 模倣して活動できる場を設定できたか

教材曲「みんないっしょに」の活動の内容を知らせるために、指導者による示範演奏を毎時間の活動の始まりに行った。音を聞くことによって、児童⑥、⑩、⑪、⑬、⑭は活動の内容を把握して分担奏をすることができた。また、児童が順番にみんなの前に出て表現することによって表現を聞いている児童にもより活動の仕方が分かりやすかったと思われる。さらに、指導者の模倣をすることからリズムを変化させたり、楽器の奏法を変えて音色を変化させたりした児童も見られた。これは指導者の示範が活動の仕方を知らせるだけでなく、児童の表現を広げていくために重要な役割をもっていると言える。

(4) 相互に聞いたり、交互に表現する場を設定できたか

本題材の活動は5つの楽器を5名の児童が順番に分担して演奏することによって行った。教材曲の歌の中で楽器が出てくる順に楽器の配置をして、それぞれの児童が自分の前に演奏する友だちが誰であるか分かりやすいようにした。児童④が自分より前に演奏する児童⑨の分担の箇所を演奏するよう援助したり、児童⑥、⑪、⑬が指揮によって友だちが演奏する箇所を示していくなどが見られた。これは、指導者の示範や友だちの演奏を聞いたり見たりすることによって分担奏の意味が分かりやすかったためであると思われる。また、本題材では分担奏を行うことによって児童相互のかかわりの場を設定したが、楽器を演奏することによるかかわりだけでなく、演奏を聞きながら指揮をしたり、それを身体表現する児童も見られた。この教材曲の構成（1つずつの楽器の音色から広がり5つの音色を合わせて終わるといった展開）によって設定される場が、児童がそれぞれ自分で活動を広げていくことを可能にしたと思われる。